

「……サブリミナルの『華』を語りまじゆ……」



Kōzō Aoki 青木幸三

●(有)メンアットワーク青木 代表取締役
 出身/名古屋市生まれ
 血液型/B型
 信条/「理路整然」「和して同せず」
 夢/「極上手打ちうどん店の開業」
 好きな言葉/「目的・結果不一致の法則」=ライブニツヒ
 嫌いなこと/見栄虚飾、強欲、不誠実、自己榮栄



“競馬好き”がたくさんいる愛産協会員の中に、競馬界に身を置き競走馬の表裏を知り尽くした方がいるとの情報をキャッチ。その人の名は、昨年出版された『追憶』が好評の(有)メンアットワーク青木の青木社長。今回のインタビューでは、どんなお話が聞けるのか、花井さんが競馬界の達人?に挑む!

●●●
胸に迫る美文の著書から

—ご経歴を拝見すると、競馬メディアの中で、大変華やかな活躍をして来られた方という印象があります。インタビュアーとして、ライターとして、大先輩にお話を伺うわけで、昨夜からどうしたものかと悩んでおります(笑)。

青木「いや、もう、今は汗にまみれて働いている男です。そんなことは意識しないで何でも聞いて、好きなようにまとめてください。」

—そのお言葉は意外です(笑)。実は、それまでも思い違いをしていたことがあるんですが、著書を読ませていただいて氷解いたしました。どこか荒っぽくて斜に構えた業界記者風の人を想像していたんですが、胸に迫る美文で、これはちょっとイメージが違うんじゃないかと。

青木「ありがとうございます。おかげで売れ行きは好調で、女性の方に評判がいいようです。」

—天国へ疾走した悲運の駿馬について、その追憶をしたためていらっしゃるわけですが、アンソロジー(名詩選集)として成功してらっしゃると思います。ただ、最初にハマノパレード(事故で予後不良となった馬が安楽死・屠殺処分されるようになるきっかけとなった馬。一昼夜苦しんだ拳句、愛知近郊の屠殺場へ送られた)で、その扉が開かれるのは、読者にとって衝撃的すぎると思うんです。私はこれ一編を読んで、しばらくこの本を開じたままでした。

青木「実はそういう意見が編集の段階ですであつたんです。花井さんのおっしゃることも良くわかります。でも僕としては、これをどうしても最初に書いておかなければならない、先に進めないものがあつたんですね。今では、安楽死は当然のことです。けれどその前にこういうことがあつたんだよと、「追憶」のプロローグとしては省けない部分なんです。」

—ハマノパレードが屠殺場行きとなった日の倉田市場の掲示板に“さくら肉・「本日締め」400キログラム”と白墨で記された。あの部分も含めてですね。どうも真実というものは、美

しく成立しないものですね。ちょっと話題を変えていいですか。

青木「どうぞ、どんなことでも。」

—「テスコガビー」という牝馬が気にかかるんです。青木さんも“不世出の美女”ときっぱり書いていらっしゃる……女は、男の人以上に美しい女が気にかかる（笑）。

青木「あの馬は牝馬のサラブレッド史上、稀有な存在です。競走実績ばかりか、容貌にも恵まれました。まさに“いい女”です。青毛というんですが、真っ黒に輝いて濡れたような、そんな感じの体なんです。大柄だね。疾走する姿はもちろん、立っているだけでも絵になる。ミス・ユニバースコンテストなら間違いなくグランプリですね。しかも隣で負けじと微笑んでいる準ミスとの差は歴然、といったところでしょうか。美女の常で、性格がわがままそうなもの、またいい……。」

—そのテスコガビーの姿かたちをイメージしようとしたら、女優のエヴァ・ガードナーが浮かんで来たんですよ。

青木「そうですか。エヴァ・ガードナーは高貴な雰囲気を持っていると思うんですが、どちらかと言えば、テスコガビーは男っぽいところがあるんです。フン、何さ！みたいな、西部女のような……。」

—私はエヴァ・ガードナーに「高貴」というのはないんです。たまたま「裸足の伯爵婦人」なんかやってたけど、伯爵婦人といった階級の美しさではなく、妖しくて野性味があって、しかもスケールが大きくて、という、天分の上にあぐらをかいて、周りもそれを認めざるを得ないみたいな。

青木「僕は13歳くらいから、年に400本くらい親にかくれて映画を見ていたんです。子供の頃にエヴァ・ガードナーを見たせいかも知れませんねえ（笑）。僕はテスコガビーは、ソフィー・マルソーといった感じです。肉感的で、どこことなく人を寄せつけないような、そんなところがあって。何ととっても美女の上に“速くて強くて頑丈”。女の子の三冠王ですから。」

—青木さんの文章に好きな表現があるんです。オークスでのテスコガビーの勝ち方なんですが「他馬に影も踏ませなかった」、続けて「他の19頭は違うフィールドで、別の競走をしていたと言っても過言ではない」というところです。超ド級の強さが伝わってきます。

青木「桜花賞の時の実況の杉本アナウンサーも良かったですよ。「なんにも来ない。何にも来ない。テスコガビー以外何にも来ない」そのままなんですが、そのままの凄さというのがあるんです。」





●●●
競馬史上初めて馬の後援会を

——前畑ガンバレ、みたいなものですね。

青木「天分に恵まれていたところへ、これが“競馬を覚えた”んです。80の力で100走ってしまう。好戦的でもあるんですよ。故障後は再起を期待されましたが、とうとう復帰は出来なかった。結婚にも向かなかつた不幸せな絶世の美女といったところですよ。でもあれだけ走っていると、体の中の次へ伝えるべきものを消耗してしまうのかも知れません。美女と呼ばれた実績馬の多くが、引退後とか繁殖界ではあまり貢献していませんね。人間でも女優さんなんかで考えると、そういう人が思いあたるでしょう。」

——う〜ん。そうですね。美しさとか華やかさとかいったオーラみたいなものと引き換えに、安定した幸せを手にすることができないような……。[華]といえ、ウチュウオーという馬のことを「品格があって華がある」と評してらっしゃいますが。

青木「これは僕が競馬世界に進むきっかけとなった馬です。僕自身、大学生活に悩んで、大学そのものもゴタゴタしていた時ですが、生まれて初めて競馬場へ行って運命の出会いをしたんですよ。澁刺として、骨格がしっかりして、焦げ茶色の顔に白い流星が走っているんです。その上、目が何ともつぶらで、すばらしい馬なん

ですよ。それが僕の見ている前で、奇跡とも言うべき勝ち方をしたんです。すっかり魅せられてしまいましたね。」

——時代劇スターだった市川雷蔵さんをウチュウオーにオーバーラップさせてらっしゃいますが。

青木「“映画小僧”でしたから。子供の頃から市川雷蔵とグレゴリー・ペックが大好きでした。特に雷蔵さんは撮影風景の見学に行つて、声をかけてもらってますから、思い入れも強いんです。“坊、どこから来たんや”と言われて、なぜか、“貴方の映画を将来創る”なんてことまで言ってしまったんですよ。あの人は“約束やで”と笑ってましたけど。僕は子供心にも、あの人の容貌だけでなく、役者としてのすべてに“華”を感じてました。そこへその出会いとやりとりがあって「映画監督、しかも雷蔵の時代劇を撮る」というのが、大学卒業後の目標にまでなっていたんですからね。」



—それが37歳の若さで亡くなられた。ショックだったでしょう。

青木「ウチュウオーを見た4日後の出来事、もちろん大ショックでした。けれど夢を失った瞬間に、僕はウチュウオーに雷蔵にかわる何かを与えられたんですね。そうして考えてみると、ウチュウオーはまさに競馬界の市川雷蔵だったんですよ。品格があって堂々。レース運びはスターにふさわしく、打算なしの正攻法です。のめりこんでしまいましたね。ますます大学に足が遠のき、アルバイト先の人達まで巻き込んで、後援会まで作りました。その後の3年間は、後援会全体でウチュウオーだけを応援していたんです。競馬史上初めてと言われたんですが、パドックで横断幕を持ち出しましてね。」

—心の愛馬だったんですね。けれど、どうしてなのでしょう。スター、天才、と言われる人も馬も、命の短い人が多い。

青木「ウチュウオーの勇姿は、たった1156日なんです。強かったけれども、その間、絶えず故障と戦ってましたね。引退する直前、4本の足全体にバンデージが巻かれていたほどでしたし。」

—死に方が哀れです。預託先で撲殺されてしまったのでしょうか。

青木「そういう運命なんです。天寿を全うするというケースは、サラブレッドの人生にはほとんどないと言ってもいいでしょう。引退後は物理的、経済的な問題が大きく関わってくる。サラブレッドというのは、極めて血管が細くて、毎日を拭いてマッサージしてやらないと発狂することがあります。それ一つ考えても、引退後の馬の世話というのはね……。預託先の九州の土地柄というのもあると思いますが……。」



—テスコガビーは引退後、自分が英才教育を受けた思い出の牧場で、雪の降る日、突然走り出して、心臓マヒで亡くなったんですね。青木さんは、テスコガビーの死を幸せと考えてる一人とお

っしゃるけど、私も彼女は幸せだったと思います。最後の情景にも華がある、そんな感じがします。

青木「しかし「華」って何でしょうね。僕はまだ答えは出せないです。トウショウボーイ、テンポイント、彼らには華があった。でも同じように強くて、彼らより美丈夫のグリーングラスには、僕は華を感じなかったんです。」

—私の課題でもあるんですよ。答えが出たら是非教えていただきたいと思います。

予定時間をはるかに超えて“華談義”“馬談義”“女性の役割と使命について”など話は発展。ちなみに、締めくくりにいただいた青木さんのこれからの目標は「産業廃棄物業界のイメージアップ」でした。



INTERVIEWER

花井 美紀

(株)コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネーター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。



「……サラブレッドの「華」を語りましょ……」